

## 竜楽のおじゃまします！



**三遊亭竜楽** 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年に三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。

シリーズ「竜楽のおじゃまします！」の対談コーナーも、回を重ねるごとに熱が入ってきたようです。今回は、古典芸能の分野にお詳しく、自ら歌舞伎のあの「引窓」を実演してもらったしやる文学部の塚本先生にお話を伺います。



**塚本康彦** 中央大学  
文学部教授

つかもと・やすひこ 1957年東京大学文学部卒。64年から中央大学文学部教員。近代文学を担当。著書、朝日選書『能・歌舞伎役者たち』他。95年前進座劇場において『双蝶々』の「引窓」を自主公演した。

## 塚本先生“古典”を語る

竜楽：さっそくですが、先生のご本をいろいろと拝見させていただきますと、一般的に我々が考えている学者先生というイメージとは大変に異なりまして、各方面に御造詣が深くいらっしゃいますが、なぜ中央大学に席を置かれるようになったのか、その辺りからお聞かせ下さい。

塚本：いかにして大学に職を得るに至ったかということについては、別に悪事をなしたわけじゃないのですが、なかなかしゃべりにくいものですね。しかし別に隠すことでもないで申し上げますと僕が大学院を満期退学したのは昭和37年で、就職がまま

ならなくて、高等学校や中学校の非常勤、家庭教師をして食べてました。

そのうち、文学部の創設以来いらっしゃった安川定男先生に引き合わされ、安川先生のお蔭でやっと中央大学へ入ったんです。

竜楽：先生の、中央大学のイメージというものはどういうものでしたか。

塚本：そうですね。今はもう各大学ともスクールカラーというものは殆どなくなりましたが、「質実剛健」という昔から中央大学についていわれているそのとおりのものでした。

竜楽：まじめという？

塚本：いい意味で愚直な感じがしましたね。

竜楽：さて、そろそろ本題に入りたいと思います。先日、先生の「ロマン的人物記」という本を読ませていただいて、あまりにも幅広く古典芸能に通じていらっしゃることに驚いたんです。

塚本：いえいえ。教師という人種は世界が狭いですからね。その中じゃ、少々稽古事なんかをやったということでしょうか。

竜楽：もともと謡曲のプロというか、お家の生まれでいらっしゃるんですよね。

塚本：祖父は、小役人のかたわら一応能役者でしたし、父は各種の職業を転々としましたが、一番長かったのは謡曲の師匠ですから、まあそういわれてもいいかも知れません。

竜楽：先生は、本格的に芸能の分野で何かやろうかと思われたことはなかったですか。

塚本：そうですね。父など私がどこかの大学を出て自分の後を継いでくれることを望んでいたろうと思います。でも古典芸能の世界にあっては世襲制の壁が厚いでしょう。我が家は名門でもないし、内弟子体験も無い父は、いろんなハンディを背負いながらやっていたんですね。その姿を見てると親父の後を継いだとしても、先が見えてるってこともありました。師匠の世界なんかは実力次第ですよ。

竜楽：私の場合、それが悩みの種でして（笑）。文楽の世界なんかでは、どんなえらい人の息子さんも一番下っ端からですよ。

---

## 名門の息子は？

---

塚本：僕は市川団十郎の家庭教師をやります

したけど、彼は11代目の団十郎の息子として生まれたから12代目団十郎になったわけです。

竜楽：団十郎の家庭教師をなさったというのは？

塚本：それはね、前にも申したように、定職に就けないので非常勤などで食べていたわけですが、その一つに青山学院中等部という口があって、団十郎はその生徒でした。

竜楽：ああいう方というのはやっぱり勉強の方も覚えはいいんですか。

塚本：いや、さっぱりでした。もっとも、昨日は踊り、今日は鳴物といったふうに、あれだけ稽古事に追われると学校の勉強なんか無理だと思いましたね。

竜楽：私も狂言を習っているんです。そうすると、いきなりやらされるわけなんですよ。

塚本：誰に習ったんですか。

竜楽：野村万之介先生です。落語は師匠が何回かやってくれるのを見て、一日おいて今度は仕草を中心に一日やって、また一日おいて、四日後くらいに初めてやらされるという感じです。狂言はその場ですぐしなければならぬので、落語は特別で、他の古典芸能の方々は記憶力のよい人じゃないとできないという感じがしておりました。落語の世界ではやらされる前に話を全部知ってますから。

塚本：僕も謡を高校までは祖父に、大学にはいったからは観世寿夫先生に習いましたけれど、あの寿夫先生にあっても、曲を少しずつ先生が謡ってそれをまねて謡うという形でしたよ。

竜楽：そうですね。ところで芸の世界だけでなく他の学問の世界でもあるのかもしれませんが、先生が書かれた団十郎の「化ける」ということに関してお話しして下さい。

塚本：団十郎については二度書いています

が、先の文章は彼の芸の拙劣、特にその口跡のひどさを批判したものです。ところが何年ぶりかで見ましたら、口跡の点はちょっと聞き苦しいところが残ってましたが、そんなことは問題じゃないくらいすばらしくなっていた。団十郎によって歌舞伎全体が救われると思われた。大器晩成ということをあんまり信じないのですが、団十郎に関してはそれが実現したのではないかと思いますね。「化ける」という現象を目の当たりにしたわけです。後の文章は彼に対するほぼ全面的なオマージュです。

竜楽：まるで違うということですか。

塚本：そうですね。僕に舞台の鑑識眼がそれほどあるとは思いませんが、でもまあ、断言できるんじゃないでしょうか。世評も高いですよ。

竜楽：私も歌舞伎は好きですので、すごくわかります。先生がお書きになった「歌舞伎役者ならではの恰幅や色香」ですか、江戸の香がするっていうんでしょうか。

塚本：そうですね。彼の存在感は圧倒的です。

竜楽：落語なんかもそうですが、何か時代の匂いがしているような、その人が出てきたときにその世界に入れるようなものがあります。

塚本：当人が出てくると、客の方は実にらくにその世界に溶け込めるとというのが芸力というものでしょうね。

---

## 歌舞伎だからできた !!

---

竜楽：そうそう、先生の舞台の話をお伺いしようと思っていたんです。

塚本：何故歌舞伎なんぞやったかという、だんだん歳をとって来た、一回限りの人生何かに燃えたいと思ったわけです。初めはお金の関係で公民館でも借りてやろう

かと思ったんです。だけど歌舞伎というのはやっぱり様式美が肝要ですから、アンゲラ劇のようにどこでやっても、というわけにはいかない。家人の助言もあって、思いきって前進座劇場でやりました。

よく歌舞伎がやれたなあ、師匠もそう思われたかもしれませんが、僕は逆に、歌舞伎だから、ちゃんと出来あがっている型のとおりによればどうにか様になる歌舞伎だからやれたんだと思っています。新劇だったらとても見られたものではなかったでしょうね。

竜楽：相手役はやっぱりプロの方だったんですか。

塚本：濡髪役など亡くなった高木(前総長)さんをお願いしようと思ったんですが、やはり無理で、結局前進座のプロに頼みました。プロ、玄人は私が一通りの所作をすればちゃんと合わせてくれる。そこが型の強みだろうと思います。僕には目立ちたがり屋の所が大いにある、なんとしても主役をやりたい(笑)。その他大勢より主役が好きだから、自分で金を出せば主役ができると思いましたね(笑)。

竜楽：やる前の稽古と、当日舞台にぱっと上がった時の感じってだいぶ違うと思うんですが、あがりませんでしたか。

塚本：やっぱりこわいですよね。絶句しちゃったらどうしようとか、花道に入る前、鳥屋(とや)で控えている時なぞどきどきしました。

竜楽：同じ人前でも授業とはだいぶ違いますか。

塚本：それはもちろん。でも、ある程度あがるということは大切だと思います。終始冷静だったら意外な能力は開発されない。競馬にしても、カンが立っている馬が勝つようだから。

竜楽：我々は落語をやるにあたって、踊りを習えだとか言われますが、先生がいろいろ



るなさっていることとご専門の授業とはどのような関係があるのでしょうか。

塚本：それはまず完全に関係ないと思いますね。授業で、能や歌舞伎の話はしますが、あの体験を結びつけるなんてこと、まったくありません。

僕は道楽や趣味というのは、できるだけ自分の仕事と切れてなきゃだめだと思っているんです。これらを授業にどう使ってやろうかと考えて稽古事をしていたら、第一おもしろくないですもん。

僕は四十の手習いで、剣道を数年間やったのです。文学というのは、キザな言い方になるけど、まあ自意識の世界ですよ。ところが剣道においてはその自意識を駆逐すればする程、無意識の領分を増やせば増やす程、腕が上がるのがわかりました。平たく、具体的に言うと、僕がメンならメンを取ろうと思ったとたん僕の方が一本取られている。僕みたいなヘナチョコ剣道でも、ごくまれに鮮やかな一本が決まった時は、ああだこうだ考える余地なく、自然に身体が動いている。

道楽や趣味と仕事とが切れていることの功德の説明になったかどうか、わかりませんけれど。

竜楽：神聖な学問の世界のことですから、そういうものなんでしょうか。我々落語の世界は噺家になって3年稽古して、あとは遊べっていうんですね。ここでいう「遊び」というのは、落語と直接的には関係ないんですが、この「遊び」が話に魅力を与えるようです。先生の授業もそういう意味では魅力があると思うんですが。

塚本：僕は、人生に無駄は一つもない、無駄は必ず生きると信じていますから、おっしゃるように歌舞伎も剣道もそれこそ無意識のうちに授業に関係しているかもしれないね。

---

## 無意識の中に魅力が？

---

竜楽：無意識でやるっていうのは相手も意識しないってことですか。

塚本：お答えになるかどうか、私が言いた

いのは、踊りなんかでも手のさしひき、足の踏み方をああしようこうしよう意識していたら、本人はいい気になっているのかもしれないが、観客を酔わせることはできないということです。

竜楽：無意識にことが運べたとき、魅力が生まれるということかも知れませんね。

塚本：先程おっしゃった相手を意識するかどうかの問題ですけど、やっぱり自分の話に学生が湧けばこっちものちちまう。湧かないと滅入ってしまう。そういうことは当然おきます。しかし、十分準備をして今日はうまく行くぞと思ってても、そんなでもない。その反対のこともある。この問題の方が面白い。

竜楽：寄席の場合、今日のお客様ならこの話をやればまず大丈夫と思った時ほどあぶないですね。とにかく扱うものがナマモノですから十分注意しませんと（笑）

塚本：落語の世界くらい、観客の反応との関わりの深いものはないかもしれませんね。

竜楽：「噺家殺すにや刃物はいらぬ、あくび3つで即死する」なんてどどいつがありますが、あくびひとつしてくれたおかげでアドリブから爆笑をとれる時もあります。

塚本：やっぱりアドリブってというのは、のってくとポンポン出るものですか。

竜楽：そうですね。その時に舞台上でギャグを発見することはずいぶんありますね。

塚本：でもやっぱり、ある程度用意された

のがいくつかあって、その内の一つをパッと使うんじゃないですか。

竜楽：実は皆さんがアドリブとっていらっしやるほとんどがそれです（笑）。いかにも今思いついたかのように聞かせるのが芸人の腕でして……。もちろんその場でできるものもあります。

塚本：僕は、全く無からは生じないと思いますけどね。

竜楽：その登場人物になっていればその台詞が出てくるんです。

塚本：かつて完璧主義者の文楽が絶句した時のこと。「申し訳ありません。もう一度勉強し直して参ります。」とか言ったのですが、実は他ならぬ「申し訳ありません。もう一度……」というその文句をずっと前から練習してたってことです。つまり、だんだん歳をとって、やがてはそういう醜態をさらすことになるだろうからその時に言うことを何回も何回も練習して、その時が実際に訪れて使ったそうです。僕はそういう話は、とても美しいと思いますよ。

竜楽：本当に芸を追求していたと言いますか、芸をどういうふう考えるかということだと思います。

塚本：僕は、人生万事努力なりと思っているものだから、アドリブみたいなものも日頃の研鑽に結び付いているとのだと考えたのです。

---

## 文化の香を消さないで!!

---

竜楽：そうですね。その人の芸の積み重ねが無意識のセリフを生むということだと思います。

話の視点を変えて、今度は演じる側から観客側、つまり大学でいえば今の学生について話を伺いますが、例えば中大生にカラーがなくなったといわれますが、このこと



はどの大学にも言えるでしょうね。

塚本：最初に申したとおり、どんどん薄れていると思います。それはこの世の中すべてについて言えることでしょうか。芸人の世界でも個性的な癖の強いのは少なくなりましたね。あるいは、今の学生はえらく子供っぽくなったともいわれますよね。

駿河台に校舎があった頃、学園紛争が始まる頃だったかな、入学式の後、新入生に向かって、雑草の会とかいった善人グループが話をしたんです。「おめでとうございます。これからは級のみんなど手を組んで仲良く頑張りましょう。」とかなんとか。すると一人飢えた狼みたいな男が「そんな話は聞きたくない。級全員仲良くやるなんてことは中学や高校のホームルームでさんざん言われてきた。大学に入ったからには、これぞという友達をつかまえない。時間がかかってもいいから自分の判断でもって見つけたい。」って叫んだんです。僕はそれを聞いて、大学生っていうのはやっぱりこうあるべきだなあと思ったんです。

今の状況を見たら、OB達は「俺達はこんなじゃなかった」と嘆くでしょう。また大学側もサービスしすぎて、学生達が子供っぽくなることを助長している。例えば、文学散歩とか、研究旅行とか、古典芸能鑑賞とか、いろいろなイベントを大学がやりますよね。今の学生はそうでもしないとなかなか実行しないから、それはそれで意味はあるとは思いますが。ただ、昔のOB達の話だと、授業が休講だっていうとタクシーに相乗りして歌舞伎の幕見を見にいったそうです。場所がお茶の水だからできたことでしょうか。

食文化の方だって、OB達は金に余裕があると、「藪」の本店や「ぼたん」や「いせ源」ののれんをくぐった。今の学生は学食の画一的な品を呑み込むばかり。

竜楽：私もお茶の水の頃はいろんな店を探



索するのが楽しみでした。

塚本：昔は喫茶店なんかで「お前明治か、俺中央だ。彼は日大だよ」というような会話がポンポン飛び交いました。そんな空間を有するのが大学だと思うんです。この点でも本学が、草の緑に風薫る多摩の地に移ったことで失われたものは多い。今更言っても仕様がなけれど、そういう問題を念頭に置くことは大事だと思います。

竜楽：今日は長い時間、お付き合いいただき本当にありがとうございました。楽しい時間を過ごすことができました。

塚本：とても気持ち良くお話ができてよかった。今日は素面でしたが、酒が入れば気分も高まってさらによかったかも知れませんね。

#### 対談を終えてひと言

先生がたいへん話し上手、聞き上手で、ホストとしてこんな楽な対談はありませんでした。これだけお話が面白いんですから歌舞伎の次はぜひ落語をやっていただきたいですね。校舎を寄席に仕立てればできますよ。毎週なんていいません・・・、タマでいいですから。